（４）②様式第４号－２（報告書）

NITS・教職大学院等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 国立大学法人福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
	事業名： 「協働探究ラウンドテーブル奈良 2022」
	研修等名：【NITS・連合教職大学院（奈良女子大学）コラボ研修】 「協働探究ラウンドテーブル奈良 2022」 JALOODA との対話 2―仕事の美しさとは？
	開催日時：令和４年 11 月 26 日 13 時～17 時 開催場所：奈良女子大学（奈良県奈良市北魚屋東町） 参加人数（総数）と参加者の属性：（109 人）教師 32 人、教育行政 11 人、民間 3 人、高校生 63 人

内容：

教師は生徒から学ぶ。それならば、教師が生徒とともに学び合いながら専門性を磨きあげることができる教員研修が必要ではないか。このような課題意識で、連合教職大学院（奈良女子大学）は「協働探究ラウンドテーブル」を研究開発した。本申請事業では、ラウンドテーブルの研究開発で得た知見を活用して、教師と生徒が「令和の日本型学校教育」の実現において鍵の一つとなっている「探究的な学習」のイメージを豊かに描くことができるように支え促すことに挑んだ。

この目的を実現するために、日本航空株式会社（JAL）の産学連携部（吉村真紀氏）・意識改革推進部（片桐潔志氏）に協力いただいた。「探究的な学習」の質を左右する要素の一つは、他者との出会いとそこから生まれる対話の質にある。両氏の語りを聴き、そこで示される物語や出来事を自己の内面へとつなぎ、それらの持つ意味をめぐる探究的な対話を通じて、自他ともに理解が深まっていく学びの姿を具体的に体験してもらうことにより、「探究的な学習」における学びのイメージを実践的に獲得してもらおうと考えた。

探究（研修）課題は「仕事の美しさ」とした。修練を重ねて技芸を身につけた人には、自らの仕事に対する美意識がある。それがその人の仕事や行動を吟味し、しっかり立たせてくれる。こういう世界があるものの、思い返してみれば、おとなも子どもも、自らの仕事や行動を「美しさ」の視点からじっくりと考えてみる機会はじつに少ない。そこで「仕事の美しさ」の具体例として JAL の仕事を取りあげ、その「美しさ」を三つに分節化して構成した Session における対話を通して、「探究的な学習」のイメージを豊かにすることを試みた。

参加者は、教師（おとな）と高校生を混在させた 1 組 4～5 名からなる 25 のグループに分かれて、探究課題に挑んでいった。以下はその展開過程である。

1 趣旨説明とアイスブレーク
2 Session1 統一性のある美しさ （ワークショップ：吉村真紀氏）
3 Session2 個性が輝く美しさ （トークセッション：吉村真紀氏・片桐潔志氏）
4 Session3 つながりのある美しさ（モデレーター：鮫島京一、コメント：吉村真紀氏、片桐潔志氏）
5 リフレクションと学びとったことの作品化

後日、各人の作品を一冊のデジタル本にまとめ、事後アンケートの結果とともに共有した。

成果：

テクノミックス社が開発した「あんしんメール」アプリを用いて事後アンケートを実施し、量的・質的評価を行った。

量的な評価としては、高校生の参加者（回答率 80.6%）のうち「たいへんよかった」が 76%、「よかった」が 22%となり、教師（おとな）の参加者（回答率 69.5%）のうち「たいへんよかった」が 72%、「よかった」が 25%であった。全体として 95%以上の高い評価が得られた。質的な評価としては、ラウンドテーブルで学びとったことを記述してもらった。特徴的な記述としては、高校生では「世代を超えて共通のテーマで話し合うことのおもしろさ

を学んだ」「仕事をすることについての理解が深まった」「自らの生き方について問い直した」であり、教師（おとな）では、「高校生のもつ潜在的な力を目の当たりにした」「探究的な学習はもとより、キャリア教育のあり方や学習指導方法について示唆を得た」「仕事に対する向き合い方」「組織と個人との関係を問い直した」であった。

これらの結果をふまえ、教員研修としての成果として考えられるのは以下の 3 点である。

(1)生徒と教師がともに学び合うことにより、「探究的な学習」における学びのイメージを具体的かつ実践的に描き出すことを促した。

(2)教師においては「探究的な学習」における学習指導における留意点の獲得はもとより、校内研修の設計方法について新しい視点をもたらすことへとつながった。

(3)生徒も教師も「生き方」についての切実な問いを抱えており、このことが境界を超えた学び合いの条件を用意することがわかった。

アイディアや工夫したこと：

(1)創出したい研修を実現するために、JAL、アクリート社、テクノミックス社と綿密な打ち合わせを行った。

(2)運営を担うメンバーにラウンドテーブルの設計段階から参画してもらうことにより、「校内研修コーディネーター」としての資質・能力の形成を促す研修としての要素を組み込んだ。

(3)グループ活動が中心となるため、全体での対話や個人による学びが周縁化されてしまう。そこで、リフレクションでは、個人で学びを意味づける場面を設け、それらを組み合わせて全員で一つの作品をつくることにより、協働的な学びと個別最適な学びとを統一的に実現しようと試みた。

(4)教師には教員免許状更新講習の発展的解消後、研修記録を残していくことが、生徒には「総合型選抜」に対応できる活動記録を残していくことが求められる。両者を統一的に実現する実証実験としての側面を本事業に組み込むために、アクリート社、テクノミックス社に協力してもらった。

＜写真・図など＞

①アイスブレーク

②Session 1

③Session 1

④Session 2

⑤Session 2

⑥Session 3

⑦Session3

⑧Session3

⑨リフレクション